

資料紹介

ラヂーシチェフの『ペテルブルクからモスクワへの旅』について

Пармиев, А. Н. Путешествие из Петербурга в Москву. С-Пб. 1790.

澁谷 一郎

「私は自分のまわりをながめた——私の心は、人間の苦惱で傷つけられた。目を転じて私は、自分の内部を見た——そして人間の不幸が人間から、彼がそのまわりの事物を正しく見ない所から、おこるのを見た……私は自分の中に、迷いと斗う十分な力を感じた、そして言いたい心の喜びを——これこそ、君が読むであろうものを書くように、私をうながした考えである。」(ラヂーシチェフが『旅』へ附けた献辞の一節)

一九四八年と五二年は、ラヂーシチェフの生誕二〇〇年と死没一五〇年に当っていた。ソヴィエトのジャーナリズムは、学

資料紹介

術専門誌を含めて、この兩年の記念日のために、大きな紙面をさいた。一方その出版界においても、『旅』を含む彼の種々な選集が、多くの版を重ね、伝記・研究書・パンフレット類の出版も、さかんにおこなわれた。私がここに資料として紹介する『旅』の版も、これら記念出版の中の一つである。

Пармиев, А. Путешествие из Петербурга в Москву. 1749—1941. Москва, Ленинград. 1950. 253 стр.

この本は、『旅』および附録として『頌詩《自由》„Вольность“ Ода』……村ノ旅行記の断片 Отрывок путешествия в……И……』と『ラフローイ教授による『大いなる憎しみと大いなる愛の書 Книга великой ненависти и великой любви』と題する序文を、おさめている。本はいたる所に、十八世紀後半のロシア生活を示す古画や、『旅』の初版の写真版がぞう入されていて、記念出版らしい趣きをそえている。序文は、『旅』の内容よりは、それを出現させた一般的な時代背景・経歴史的な基盤・『旅』の文学史上の意義・その思想の十九世紀における後継者たちとのつながり……について触れている。小論の目的とする所は、『旅』そのものの内容であるから、この序文には触れない。

註(一) 生誕二〇〇年については、種々の事情から、資料を集めることができなかった——ただ、選集のある版の序文から、四九年八月三十一日づけの《Правда》の一節を、間接的に読むことができる。

一橋論叢 第三十二卷 第一號

五二年の死没一五〇年については、直接目にふれたものだけでも、新聞で四、一般誌で二に上つており、これらは何れも、記念祭の単なる報道でなくて、長文の論稿であることに、注意をひかれる。学術誌および各大学・研究所の論集にのつた論文にいたつては、挙げるべきとまがないほどである。

註(の) 私が入手し、あらうは目とするものとされたのは、次のものである。

著作については、表記の書物のほか、

Радищев, А. Н. Избранные М. 1949. С вступительной статьей Л. И. Клакова. 391 стр.

Радищев, А. Н. Избранные сочинений. М.-Л. 1949. С вступительной статьей Г. П. Макогоненко. lviij, (1), 855 стр.

Радищев, А. Н. Избранные философские и общественно-политические произведения. М. 1952. С вступительной статьей И. Я. Шипанова. 675 стр.

このほか、やうく世に『旅』を収める。

Евгеньев, Б. Александр Николаевич Радищев 1749—1802. (Жизнь Замечательных Людей). М. 1949. 340 стр.

Муратов, М. Жизнь Радищева. М.-Л. 1949. 247 стр.

Макогоненко, Г. А. Н. Радищев. Очерк жизни и творчества. М. 1949. 192 стр.

研究書では、

Орлов, Вл. Радищев и русская литература М. 1949. 180 стр.

Горбунов, М. А. Философские и общественно-политические взгляды А. Н. Радищева. М. 1949. 169 стр.
Приказникова, Е. В. Экономические взгляды А. Н. Радищева. 2-е исправленное и дополненное издание. М.-Л. Академия Наук СССР. 1949. 154 стр.

『ラディッセル』

Благой, Д. Д. А. Н. Радищев. М. 1948. 24 стр.

Степанов, Н. Л. Жизнь и творчество А. Н. Радищева. М. 1949. 31 стр.

Козьмин, М. Б. Радищев—провозвестник русской революции. М. 1950. 32 стр.

Шипанов, И. Я. Общественно-политические и философские взгляды А. Н. Радищева. (1749—1802). М. 1950. 32 стр.

このほか、Всероссийное общество по распространению политических и научных знаний の出版にかゝる。

以上のほか、外国語で出されたものでは、

A. N. Raditschew. Reise von Petersburg nach Moskau. Deutsch von Anneliese Bauch. 1. Aufl. Berlin. 1952. 339 S.

Evgeniev, Boris. Alexander Raditschew: a Russian humanist of the 18 th century. London. 1946. 52 p.
Stepanow, N. L. Alexander Raditschew. Leben und Werk. (1749—1802) [Literatur und Gesellschaft. 4.] Berlin. 1952. 44. [1]S.

註(7) この題名の著作の筆者として、ハバースマンは彼が「ラヂシシェフの著作」を著したことが、最近 (Мокогоненко, Г. Николай Новиков и русское просвещение XVIII века. М.-Л. 1951. 543 стр.) において著者は「これがノヴィコフに属することを、資料に基づいて主張している。これについては、プラエーイの序文でも軽く触れているが——従来みとめられた、ラヂシシェフにたいするノヴィコフの關係は、大いに变化することになる。新説にたいする短い反論は、すぐに現われた。Светлов, Л. Б.: Г. Мокогоненко Николай Новиков и русское просвещение XVIII века «Советская Книга» 1951. No. 8. стр. 94—99) しかしこの問題は、簡単に決着しないように思われる。現実には、最近の版になる選集(たとえば、前掲の Плинов の編集によるもの)からは、この作品が省かれてゐる。

資料紹介

註(7) 筆者として、ハバースマンはわからない。彼が「ラヂシシェフの著作」の著者であることが知られる。次に著者の著者であることが知られる。

前掲の「ハバースマン」。

История русской литературы XVIII века. М. 1951. 670 стр.

Выдающийся деятель революционной России. К 150-летию со дня смерти А. Н. Радищева. — «Правда». 1952. 9. 24.

А. Н. Радищев Пенза. 1945. などこの伝記を、私はまだ見る機会がなかった。

II

十八世紀ロシアにおいて、ロモノソフと並ぶ巨人・唯物論者・社会思想家——アレクサンドル・ニコラエヴィチ・ラヂシシェフ Александр Николаевич Радищев 1749—1802 は、中流貴族・地主の、比較的ゆたかな家庭の長男として生れた。少年は最初の本格的な教育を、短い間モスクワで受けた後に、エカテリナ女帝の少年侍従として、数年間をペテルブルクで過ごした。ついで彼は、同輩のすぐれた若者九名と共にえらばれて、「国の未来の法律家」となるために、ライプチヒ大学に送られ、六年間の留學生生活をする。女帝の指命した課程のほかに、

一橋論叢 第三十二卷 第一號

とくにフランスの啓蒙主義的な著書と親しんだこの期間の生活は、彼の生涯に大きな影響を与えた。彼らは学校をおえて帰国したが、留守中の国内情勢の変化のために、新帰朝者たちに予定されていたポストは、なくなつてしまつてゐた。ラヂーシチェフは、元老院の書記・軍司令部の法務士官などを転々したが意にみえず、一時官を辞した。彼は二年後に再び商務省に入り、ここで始めて、長官ヴォロンツォフをよき理解者として、大いにその力をのばすことができた。次第に有能な官吏として認められ、捕えられた時は、ペテルブルク税関長の職にあつた。彼の文筆活動は、一七七三年のマブリーの譚訳に始まる。彼は官吏としての職務のかたわら、『旅』の準備的労作と見られる一連の著作を、次々と精力的に執筆・發表する一方で、検閲の目をぬすみながら『旅』の構想を、人知れずまとめあげていつた。

ラヂーシチェフの思索のプロセスで、時期的にも内容的にも一つのピークをなすと見られる『旅』は、一七九〇年の初夏ペテルブルクにおいて、匿名で出版された。

『旅』はただちに、女帝および當局の注意をひく所となり、著者は捕えられて裁判にまわされた。エカテリナは彼を、「アカチーフをもしのぐむはん人」と目し、法廷は死刑を宣したが、女帝は偽善的に一等を減じて、シベリヤへ十年の流刑とした。彼はその秋ただちに、遙かなるイリムスク監獄へ護送される。

ラヂーシチェフはシベリヤの困難な生活の中で、自分の方向

をまげずに生きていた。そしてこの時期の最大の収かくは、哲学上の著作『人間 その死と不死について О человеке, о его смертности и бессмертии』で、そこには『旅』におけるほう芽の、遙かな展開がみとめられる。彼はエカテリナの死と共にロシア本土にもどり、父の持村で官憲の監視下にくらし、この時代には、経済学上の未完の論文『私の領地の記録 Описаніе моего владенія』が、書かれた。

アレクサンドル一世の即位によつて、全ての政治犯は解放され、ラヂーシチェフも首都にもどつて、新法典を編む事業に参加した。しかし彼はまもなく周囲の空氣が、期待と反して旧態によどんでいることに絶望し、他方健康上の理由から、再度の流刑への危懼をいだいたあげく、遂に毒をあふつて自らの命を絶つた。

彼の思想上の系譜については、第一には無條件にロモノソフを、ついでフランス啓蒙家の影響を、挙げねばならぬ。しかしそれだけでなく、彼は「英国からも汲んでいる。最後に、ドイツ哲学と、英國の歴史学・政治経済学に基づいて、フランス百科全書家の世界観の、機械性を克服しようとする。彼はこれに際して、フランス思想家のものした革命的立場をすてずに、社会の歴史的な・ダイナミックな概念を立てる。」

ラヂーシチェフの生涯と思想は言うまでもなく、その史的背景と結びつけて、考えられなければならない。しかしここでは、彼の足跡と彼の時代のロシアに、大きな影響を与えたと考えら

れる四つの歴史的な大事件——産業革命・アメリカ独立戦争・フランス革命・ブカチョフの農民戦争、を並べるだけで、『旅』の紹介へ急がなくてはならない。

註(5) Радиев, А. Н. Полное собрание сочинений. т. I. М.-Л. 1938. вступительном статье Г. А. Гуровского. стр. vii.

三

『旅』がその出版直後から、ツァーリズムのもとで受けた弾圧は、ロシア革命思想の受難の、典型的なものであった。それは実に一世紀以上もの間、きびしい禁令のもとにあった。だがこの禁令をくぐる流布のしかたも、また典型的であつた。ロシヤの先進的インテリの手から手へとまわつた『旅』の手写本は、三〇種をこえ、そのいくつかは外国へも流れて、『旅』の名を高めた。とは言え完全な歪曲のない版は、一九一七年以後でなければ、大衆の手にとくものとならなかつたことも事実である。現在、『旅』の最も完全で重要な版とされるのは、次に挙げる初版の写真版復刻で、附録として『旅』の研究資料と論文が、收められている。

Путешествие из Петербурга в Москву. М.-Л. Изд. Akademia. 1935.

Т. I.—Фототипическое воспроизведение «Путешествия из……» издания 1790 года. Т. II.—Материалы к

資料紹介

изучению «Путешествия из……», собранные Я. Л. Барсковом и статьи.

残念ながら、私はこの版を見たことがない。

全集として重要なものは、三巻の予定で二巻まで出ている、科学アカデミー版である。『旅』は、この第一巻に入っている。第三巻は一五〇周年当時の消息によると、出版の準備中とあつたから、あるいはすでに出たかも知れない。

А. Н. Радиев. Полное Собрание Сочинений. М.-Л. Изд. Академии Наук СССР. Т. I. 1938. [xix], 503 стр. Т. II. 1941. 429 [?] стр.

戦後の版については、前にのべた。

ついながら、最近、ロシアの思想史に関して英米で出版される文献の中で、十八世紀の研究が著るしく増加しており、それにつれて、ラヂーシチェフについてのスペースが、大きくなつてきていることは、注目すべき傾向であらう。

わが国ではロシアの十八世紀の思想について、きわめて知られていない。ラヂーシチェフに関して言えば、多少とも本格的に扱つたものは、戦前・戦後を通じて殆んどない、と言つてよい実状である。私の小論によつて、ロシア革命思想の先駆者にならう関心を、少しでも起すきっかけとなれば、幸いである。

註(6) 『旅』の初版は、著者が捕えられた直後に押収・破壊をうけたこと、その前に彼自身が焼却したことにより、十七部しか残らなかつた。その後、『旅』の全体的な形で

一橋論叢 第三十二卷 第一號

復刻のころみは、一八七二・一九〇二年の二度にわたつて、きびしい廃棄処分を受け、部分的な転載でさえも、ひどい歪曲と筆者の名の抹殺を強要された。検閲の手はさらに、彼の伝記の発表（たとえば、プーシキンによるもの）にまでも及んでいた。この間にあつてひとり日の目を見たのは、一八五八年のゲルツェンによるロンドン版であつたが、これとても、外国に流布していた写真に據つたので、誤りをまぬがれなかつた。

註(7) 一七九〇——一九〇六年。

註(8) ラヂーシチェフ自身もすでに、イリムスクからロシヤ本土への帰途、ある駅場で、シベリヤ僻地の一書生の手記に、自分の『旅』の写本をみとめたことを、『Дневник путешествия из Сибири』の中¹⁰、しるしてゐる（一七九七年）。

註(9) 私のせまい見聞によつても、これにたいする例外は、きわめて少い。馬場哲哉氏『黎明期に於けるロシヤの社會意識』（外国文学研究第一輯・新潮社・大正十二年）——伝記と『旅』の簡単な紹介。久保二郎氏『ラヂシチェフ傳』（神戸外大開学記念論文集・神戸外大・昭和二年）——伝記。山本俊朗氏『アリエクサンドル・ラヂーシチェフ——その農奴解放思想を中心として』（史観・第四十冊）——伝記。同氏『十八世紀末ロシヤ農村——カールガ縣一領地の場合——』（社會經濟史學・社會經濟史學會・1953・No.

4.5) —『Описание моего Братства』の紹介。

四、

『旅』は、十八世紀末の農奴制的ロシヤ生活の、「生きた百科全書」であると言われる。筆者の鋭い筆は、専制ロシヤのいかなる恥部をも、照らしださずにはおかぬ。その迫力にみちた叙述は、読む人の心に強く訴えるが、彼はそれ以上に自分のテーマを、倫理的・法律的・そして最後に經濟學的な論証によつて、かためようとしている意図が見られる。

著者は舞台を、ペテルブルクからモスクワへの街道に沿つて移しつゝ、各種のスタイル——對話・独白・呼びかけ・讃歌・聞き書き・論文……によつて、その第一の課題たる、農奴制との闘い、より一般的には——彼の言うように——人間による人間の圧迫との闘い、のテーマをつらぬいている。このことは、全二六章の中二〇までが、何らかの点で農奴制にふれていることから、明らかであろう。

しかし問題は、この中心的テーマをめぐつて、きわめて多くの側面から展開されており、それらをここで全体としてまとめることは、とてもできない。そこで私は、筆者の目に映じた農奴の生きた、それになんかする彼の意見を、つとめて彼のことばを通して、紹介してみようと思う。（以下）《……》は章の名、和数字は、表記の書物の引用ページを示す。）

まず『Жоbани』でラヂーシチェフは、農奴による賦役の利益を、農夫の口をかりてはつきりと示した。一人の農民が日曜日に自分の畠で、熱心に耕やしている。彼は二頭の馬を交代に使つて耕作しながら、馬には休憩を与えるが、自分は休まない。その農民が地主の畠で働らく時には、ずつと熱がない、「主人の仕事に長々と働らかされて、ありがとつとも言われない、」（五一）と彼は率直に訴えている。より一般的には、強いられた労働の欠陥が『Хотимов』に、くわしく説かれている。さらに『Торжок』の頌詩には、「奴隸制の安穩の天蓋のもと、黄金の夷りは生れない。……そこでは豊かな畠も荒れはてて、鎌も鋤も用をなさず、怠惰な耕牛は鋤をつけたまま寝こむだろう。」（一六六）反対に「全くの人が自分のために種子を蒔き、自分のために刈りとる」時、「畠は涙を流すことなくして、たちまち肥えるだろう。」（二一二）と歌われている。

同じ『Жоbани』の章で、主人公である旅行者は、農奴についての重要な定義——「農民は法の前に死人である в законе мертвы」（五二）を挙げる。農民が罪を犯す時にだけ、法律は彼を思いだしてくれる。「この考えは、私の内なる全ての血をたぎらせる……恐れろ、むごき心をもつ地主よ、お前の農民めいめいの顔に、お前への非難を見る」（同上）と、旅行者は声を大にする。

農民の法律上の無権利については、『Зайиного』でもつと強調されている。残忍な地主とその一家は、長年にわたつて農民を

資料紹介

しいたげてきた。不幸な人々を救おうとするものは、誰も現われなかつた。遂に農民の忍耐はやぶれ、暴君たちは打ち殺される。すると法律が農民のことを思いだして、彼らを死刑にしてみました。同じ地主のタイプは、『旅』の中にくりかえしてくる。（Выйиный Вороток）『Ероров』『Меное』……など）『Меное』では、公開の市場で取引される農奴の、非惨な光景がえがかれ、『Торжок』では、法の裏をかつて徴兵へ身代りに売られた農奴をひきわたす場面が、『Черная Пыль』には、農奴の男女の強いられた結婚が語られている。

旅人がたまたま訪れた農家では、四分の三まで穀から、四分の一だけ穀粉でできているパンを食べており、めぐまれた家でも、実のないシチューと、醋のようなク瓦斯が、これに加わるだけである。

無一物のほりにまみれた、こわれかけた百姓小舎に人々は、（もしいるとすれば）家畜と同居している。衣服のかわりにぼろをまとい、大人も子供も飢えて、死にかかっている。しかもこの貧しさこそ、国家の富強のもと、貴族の繁栄の源泉とみなされている。

「飢えた獣、あくことを知らぬ蛙であるわれわれは、農民に何を残しているか？ 奪いさることのできないのは空気だ。しかし、空気だけではないか」（一八七）と、『Лешка』で彼は絶叫する。この章と次の『Черная Пыль』は、『旅』の中で、全くて圧制と人々のがまん強さについて語る部分の、総決算となつ

一橋論叢 第三十二卷 第一號

ている。地主とは、農奴にたいして絶対権をもつ君主であり、彼にたいする立法者、裁判官、被告が抗告を許されない原告、判決の執行者である。その味方には僧職と、秩序の監視を命ぜられていた官吏がついていて、前者は、金づるを失いたくない、後者は、專制的に人々を支配する地位を失うことを望まない、そして両者は一致して沈黙をまもる。

農民の運命は、恐るべきものである。「その運命は枷にリベツトづけられ、その運命は臭氣たちこめるひとやにとじこめられ、その去勢牛の運命は軛にはめられている。」(一八七)

專制は、ロシア住民三分の二の、基本的な人權を奪つて、この制度は、地主の内にある全ての人間的なものを、ほろぼしつくしてしまふ。従つて地主は人間でもなければ、母なるロシアの息子でもない。

権門の大貴族 *Богрин* の控間で卑屈な従僕は、自分の領地では、專横で・わがままで・むごい小君主となる。彼にとつては、名譽・良心・廉恥・感謝の情、のごとき、およそ人間的感情などは存在しない。力の前に、てもなく屈することを恥じない一方で、他人の美質への尊敬などは、あとかたもない。ラヂーシチュエフのえがかかる人間どもは、何れもおとらず嫌惡をおこさせる——自分の息子のふしだらを甘やかす《*Защито*》の高等官・地主。農奴の娘の結婚當日に彼女を犯したその地主の息子。《*Плеши*》と《*Вышний Волочок*》のバックにある地主たち。《*Ефремов*》の中の、六〇人の娘たちを犯す「立派な・情ぶ

かい旦那」(一一九) 公開の市場から、自分の乳母とその息子を売りとはす《*Мелное*》の紳士。幼いときの親友がさげすまれるさまを、平然とながめる《*Гроциня*》の中の若い主人……など。

《*Гроциня*》では、かつて善良な主人に属していた、一人の才能ある農奴がでてくる。主人は彼を、自分の息子と共に育て、二人に同じ教育を与え、その仕上げのため外国へ送り、帰つてきたらばヴァニューシャを解放してやろうと、約束していた。しかし農奴にたいする主人のヒューマニズムは、悲しみ以外に何ももたらさなかつた。と言うのは老いた地主が、彼らの外国留学中に、解放を与えるひまがなく死んでしまつたからである。息子は、道德的に父親ほど高くなかつた。もちろん彼の中には、父によつてよき性格が育まれていたから、幼時の友を他の農奴たちのように、扱うことはできなかつた。だが彼はヴァニューシャを、自分の若い妻から進んでまもることもしなかつた。若い地主の妻は夫の友の中に、奴隷をしかみとめない。彼女は彼をさげすみ、多くの權利を取りあげてしまふ。ひとたび自由を知つた彼は、他の農奴より一段と強く、束縛を感じた。「私はいくたび亡つたよいお方を、私に感じやすい心を与えてくださったことで、うらんだことでしょう。他の全ての人々と同じ人間だと言うことなど、夢にも思わずに、無知に育つた方がよかつたのです。」(一七五)

一人の人間が、他の人間によりかかつて生きるかぎり、農奴

の運命は、安らかなものとなりえない。かかる状態をそのままにしては、農奴にたいするいかなる教育も啓蒙も、何にもならない。解決はただひとつ——農奴制の廃止である。

それはどのようにして、実現されるのか？ 農奴の解放は、「大世襲領地の相続者 великие отчичики」として残つてゐる自由主義者の「良心から от совести」ではなく、「圧制の苦しむそのものから от самой тяжести порабощения」までべきである。《Мечое》(一一六)

ラヂーシチェフは、反乱の問題と共にロシアの民族性にも、注意をむける。『旅』の始めの方の《София》で、彼は言う、「馬車は私をのせて疾走する。私の馭者は、いつもの沈んだくせで、歌いだした。ロシア民謡の調子を知る人は、その中に、心の悲しみをあらわす何ものかを、みとめるだろう。こうした歌のほとんど全ての調は、短調である。国民の耳の、この音楽上の特質にもとづいて、統治の方式を立てるべきである。ここにこそ、わが民族の魂がどのような状態にあるかが、現われている。ロシア人を見よ、彼はもの思ひに沈んでいるのだ。ふさぎの虫を散じたい、あるいは自ら言うように、愉快になりたいと、彼は居酒屋へ出かける。酔がまわると、狂暴で、大膽で、けんか好きになる。何かもちあがつたことが、彼にかかわりなくとも、すぐに口論と取つくみ合いを始める。頭うなだれて居酒屋へゆき、頬打ちで血まみれになつて帰る電船人足 бродяк は、ロシア史でこれまで疑わしい多くのものを、解くことがで

資料紹介

きるだろう。』(四九)

ここでは、農奴制の社会にあつて、著者をベシミズムから救い、彼に遙かではあるが、自分の民族の明るい未来を信じさせる根拠が、のべられている。

一方ラヂーシチェフは、環境がその中に住む人間に与える感化の強さを、みとめる。それ故に彼は、貴族の習慣が農奴におよぼす悪影響について、《Байраш》その他の章で触れている。《Зайчово》で彼は言う、一人の百姓の娘は、地主の息子の口約束や誓いのらずに、「いいなづけの夫にたいして、自分の約束を忠実に守つていた。このことは、農民にあつてまれであるが、しかしありうることである。』(九二) 著者はここで暗黙に、主人たちの乱れた生活の影響をみとめている。

《Мечое》には、この悪影響をもつとはつきり示す実例が、与えられている。売りにだされた農奴の中に——主人がだました若い農婦とめあわされた、二五才の若ものがいる。彼は、主人の「いまわしい行いの」片われで、そのお氣にいらだつた。著者はこの真の奴隷のために、悲しむべきことばを見立ててやる、「お前の理性は、高い思想と縁がない。死ぬことも、よく知るまい。お前は身をいやしめ、身分の上でも魂の中でも、奴隷となるだろう。』(一五八)

だが著者は、農奴制が人間を腐敗させる力は、農民にかりに及ぶとしても、彼らの主人に比して遙かに少いことを、かたく信じている。「野蛮人め！お前は、市民の名をおびるに値いし

ない……社会の福祉の盗人として、彼に烙印を押そう、そうすれば、彼を見る全ての人が彼をいやしみ、その上、彼の例に感染しないように、彼が近寄ることを避けるだろう。」(一三八) 農奴は地主たちよりも、遙かに清潔で、無慾で、高尚である——これは、『旅』のいたる所でぶつかる現象であらう。

著者のえがいた農奴の女たちの姿は、高い道德性をもつて、とくに読者の心をとらえる。

童貞・率直な愛の技巧・忠実さ・献身・性格の力強さと高き・勤勉……など——これらは、貴族令嬢たちの打算にみちた、弱々しい、ただれた青春から、アニエータを鋭く区別する特徴となつてゐる。素朴で、氣品にみちたロシア女である母は、彼女をこのようなものに育てた。アニエータの夢みる子供らもまた、こうしたものとなるに違いない。そして、母によつて、このように育てられる彼らは、自分の生命をも求められるような、いかなる難事にもおもむくであらうことを、著者はおそらく疑わない。『Euporo』

著者は、国民の内にもつた怒りと、そこなわれた誇りを取りかえすために、国民は恐れもなく立ち上るであらうことを警告する。農民は、自分の力にも余るような労役・極貧・飢・苛税・地主と官吏のさげすみに、じつとたえているが、自分の娘・婚約者・妻の名誉を犯される時、がまんできなくなるであらう。

『Euporo』で農奴たちは、犯された娘のために報復をする。

『Euporo』の農奴たちは、農奴の娘を犯したことで彼らの憎しみを買つていた主人を、「善良にして仁慈にみてる」ブカチョフの裁きへ、送つてしまふ。『Euporo』の農奴インテリ(前出)は、主人の情人の過ちを、自分との結婚を強いることによつて、蔽おうと持ちかけられぬ内は、まだがまんしているが、いよいよよとなると彼は、墮落よりは咎を、新兵の勤務を、死そのものをさえ、選ぶのである。

これら一連のエピソードの類似は、決して偶然的ではない。主人たちは、彼らの打ちのめされた農奴が、自分たちからはずつと前に失われてしまつた名誉の概念を、保つてゐることが理解できない。所が名誉の毀損は、きわめてしばしば農民の憤怒をよびおこす……人間の名に価するのは、農奴のどうまんな支配者ではなく、それよりも限りなく正しい。高いモラルと大膽さを示す、農奴たちである。農民たちのすぐれた道德性と、その才能に對する確信(たとえば『Euporo』の農奴インテリ)は、ふたたび著者に、國民の未來を樂觀する可能性をゆるしている。「おお! もしも重き軛に苦しめられた奴隷たちが、絶望のあまり荒れくるつて、彼らの自由を妨げる鉄鎖でわれわれ(地主・貴族——私の註)の頭を、無情な主人どもの頭を打ちくだき、われわれの血で自分の鼻を浸したとしても! 國家はそれによつて、何を失うと言ふのだらう? 間もなく、しいたげられた人々を救う偉人たちが、彼らの中から現われるであらう、この人たちは、自分の使命をよく心得ていて、圧制の権利をお

びないだろう——これは夢想ではない、まなざしは、われわれの目から未來を蔽つている時間の厚いとばりを、つきぬけている。私は、まる一世紀も先を見通しているのだ。」(一七七)

ラヂーシチエフは、反乱すなわち農民蜂起の避けがたいことを、予言する。「自分の突進をせき止められた奔流は、頑丈な障がいがあればあるほど、勢が強まる。ひとたびせきを切つたがさいご、もはや何ものもその氾濫を制止できない。われわれによつて軛につけられている同胞たちは、このようなものである。時と機会を待つているのだ。鐘が鳴る。そして、あの残忍さと言う疫病は、急流のようにゆきわたる。われわれは自分のまわりに、剣と毒藥を見る。死と焔はわれわれにとつて、自らの冷酷さと非人情にたいする、むくいである。そして彼らの軛を解くについて、われわれがためらい、かたくなであればあるほど、彼らの報復は、猛烈になるであろう。」(一三三) 著者は大いなる確証として、貴族たちにとつて恐るべき、先頃のプカチョフの反乱を回想する。

著者は、農民の怒りにもとづく全ての行動を——個々の地主殺害も、プカチョフの反乱も——圧制の当然の結果としてみとめる。「もし算術で、与えられた二つの数から、第三の数がすらすらでくるとすれば、この事件でも、その帰結は必然的であつた。殺害者の無実、少くとも私にとつて、数学的な明瞭さである。」(九三) 農民は全ての市民と同様に、法律に弁護を求めてしかるべきなのに、法は彼らを守らないのみならず、市

資料紹介

民としての權利を奪つてゐる。そこで農民に残るのは、唯一の權利——自己防衛、おう打におう打をもつて——である。

しかし著者は、プカチョフの反乱を是認する一方で、それが實際おこなわれたような形で、繰りかえされることを望まない。それは、地主への同情からではなく、未來が地主に属さないことを予見するからである。自らを軛から解放するに當つて農民は、「束縛をゆする利益よりも、むしろ報復の喜びを求め」がちであつた。所が農奴制的束縛の眞の廢止は、著者の見解によれば、現實に束縛を震るわせると共に、專制の廢止と伴つてはじめて可能となる。だが他方で共和制もまた、國家の中に、市民の眞の平等がないと、おのずから欠陥を生ずることになる。ラヂーシチエフが例にひくのは、頌詩《Богини》の中で自ら幸福の國と名づけたアメリカである。アメリカは、共和國であり、富める國である。しかもこの富は、黒奴の血と涙をもつてあがなわれたものにほかならぬ、彼は絶叫する、「われわれはこの荒廢の國を、その野が茨の茂みに蔽われず、様々の植物に富むばかりに、幸いな國と呼ぶべきだろうか？ 数百人のおごつた市民がぜいたくにふける一方で、何千という人は、確実な生計と寒暑を防ぐ庇を奪われているが故に、幸福な國と言ふべきだろうか？ おお、この肥沃な國が荒廢させられることを！ 茨やあざみがその根を深くのばし、アメリカの全ての高価な産物を、根絶やしとすることを！」(一三〇)

この一節を引用した《Горюхи》は章を挙げて、《未來の計画

「Прокр в бытнем」をえがいている。こゝで述べられることは、支配階級が当面する社会関係の不合理について、意識しうるようになる——農奴制は「上から」の改革の道によつて廃止しうる——との、観念上の仮定にもとづいている。すなわち、第一段の改革を経て専制が廃される。自由なるロシアは福祉への道に立つ。侵略戦争・宗教裁判は姿を消す。市民間の不協和はなくなる。全てのものの唯一の君主は法律である。扶養と教育の制度は改善され、家族の結びつきは強まり、人々は互いに尊敬し合うようになる。

だが完全な幸福は実現しない。国内には、まだ農奴制が続いている。農奴制は、国家の幸福・博愛・社会福祉の名において、廃されねばならぬ。《Прокр》の筆者は、貴族が農奴の即時解放に反対であることを知っているので、農奴制の漸進的廃止を導く改革のプログラムを、立てようとしている。一見するとこの論旨は、著者が他の章でのべている、農民革命の必然性の主張と、矛盾するように思われる。しかし著者が良識ある貴族の側から見て、ロシアが陥っている社会上・経済上の袋小路からの、唯一の可能な出口は、この改革案だつた。「おくれるな、わが愛する人々よ。月日は、疾く過ぎさる。わが日々はなす所なく去りゆくとして……」(一三三) 著者は実際には、大多數の貴族について、その進歩性と農奴解放への同意を信じていないので、農奴制の力による廃止の必然性への確信とくらべて、改革への期待は、きわめて力弱い。かくて著者は、変革の第二

の方法——農民革命の途を、一そう確実で現実的なものとみなす立場に、傾いてゆくのである。

《Хорюб》を結ぶ次の一節は、このことを暗示する、「ありもしないことに夢中になるよりは、馬が速歩で走るのと跑步で走るのと、駅通の旅人にとつて何れが得か、駅のやせ馬にとつて、跑馬か競走馬になることは利益になるかどうか、を考える方がためになると私は考えた。」(一三四)

では、ラヂーシチェフの頭にある積極的な理想とは何か？ 彼が考える未来のロシアの姿は、同じ《Хорюб》と《Торкю》の頌詩《Борьба》の中で、示されている。それは、共和国の、より正確には、共和国の同盟である。そこでは身分・階級の差別がない。全てのものが働らく。土地はそれを耕やす農民に、権力は人民に属する。法律は、人権と人々の所有権を保護する。筆者によると、かかる法律の改廃は、不可能であり不必要でもある。宗教の選択は各人の良心の問題であつて、国家は干渉しない。教育は、全ての人に近づきうるものとなり、母国語でおこなわれる。

著者の見解のユートピア的性格は、容易に指摘されるが、これは『旅』が、ロシアの十八世紀に書かれたことを思えば、理解されよう。

かくてラヂーシチェフは、革命の不可避と、彼が空想する正義の制度の実現を、確信はするものの、同時にこの日のきわめて遠いことを知っている。「おお、幾百万のうれいに満ちた運命

よ！その結末はなお、私の孫たちの目からさえも蔽われている。」(一八八)確信と諦めめのこの三つの組合せは、『旅』の全体にわたる、悲観的でなく悲劇的な調子のもとになつてゐる。

道は容易でない。権力の強さ・環境の停滞・周囲の敵視……全ては、既成の秩序をくずそうとかかるものに、きびしく対立する。『Sakuro』の、自分の職務を正しく行おうとした裁判官クレスチャンキンの運命は、この証明のひとつである。だが人間は屈してはならない。悪例の影響は甚だしいものであると共に、良い例もいたずらには過ぎない。アニエータの気高い心をもつ母は、娘を立派に教育することができた。アニエータの清らかな姿はまた、若ものたちの墮落を防ぎうるであらう。

良い例と共に著者のことばもまた、社会にたいする強い・確実な武器である。だからこそ著者は、自分の役割の重要性にたいする確信をもつて、『旅』に取りかかつてゐるのである。「私は自分と同じ人々の善行において、全ての人に協力者たりうると、感じた。これこそ、君が読むであらうものを書くように、私をうながした考えである。だがもしも、私の企てを良いとみとめ、良き目的の故に、思想の不成功な表現をもとめず、同胞の不幸を私と共に同情し、私のゆくえで私をかばつてくれる人を、だれか見いだすとすれば——私の取りあげた仕ごとから、二重の成果を生むことにならないだろうか？ と私はひとりごとを言つた。」(四三)

同じ思想は、宗教と哲学の歴史をだれかが書くとよい、と希

資料紹介

望した他の章でも繰りかえされている。「この著者の労作は、むだにはならないであらう。なぜなら、自分の思索の真理と迷誤へのプロセスを、明らかにすることによつて、少しでも有害な小径から遠ざかり、無知のはびこることを防ぐからだ。」(七九)

それ故に著者にとつて、人間のことばの働らきは重要である。だがことばが、全ての人を動かさぬからと言つて、失望することはない。真理は、けがれることのより少い人の心に、達するからである。「自分の作によつて、たとえひとりでも啓発できたら、著者は幸いだ。ひとりの人に、たとえ胸の内になりともし、善行の種子を蒔いたとすれば、幸福だ。」(七九)

「王制と全能に抗して立ち上つた雄々しい作家たちは、人々を軛と捕われから救えないからとて、果して感謝に値いしないだろうか？」(二〇二) ラヂーシチェフがロモノソフについて語るこのくだりは、そのまま彼自身についても起る反問であらう。「旅」はたとえいくらかでも、効を示しているだろうか？ 献辞で企てた彼の目的に、少しでも近づいているだろうか？

『旅』の最後の教行は、この反問に確信をもつて答える、「偉大な精神が、同時代または子孫たちの魂に与える働らきは……理性の理性にたいする作用」である。(二〇二)

「誉れをこがれた若ものは、私の朽ちた墓のほとりへ来て、心をこめて言うだろう、『重き権力のもとに生れたこ

一橋論叢 第三十二卷 第一號

の人は、……枷をひきずりつつ、最初に自由をわれわれ
へ予言した』と。」「(『Вольность』二一六)

註(10) 引用は前掲の選集の序文から。

Радищев, А. Н. Избранные. М. 1949. вступительном
статьи Л. И. Кляковы. стр. 27.

註(11) Там же, стр. 41.

註(12) Там же, стр. 42.

(一九五四・三・二三)